

平成 28 年 2 月 24 日放送



## ジェネリック医薬品について

県北医療センター高萩協同病院  
薬剤部 主任 塩田 千秋

司会者：ニュースやテレビ CM で名前は聞きますが「ジェネリック医薬品」とは何ですか？まず簡単に説明をお願いします。

塩 田：そうですね。近年 CM などでも耳にすることが多くなってきたためご存知の方もいらっしゃると思います。医薬品には、病院やクリニックなどで発行される医師の処方せんが必要な医療用医薬品と、処方せんがなくても薬局・ドラッグストアなどで購入できる一般用医薬品（OTC 医薬品）の 2 つに分けられます。さらに、医療用医薬品には、「新薬」と「ジェネリック医薬品」の 2 種類があります。「新薬」は先発医薬品といい、新しい有効成分・使い方が開発されて最初に発売されるお薬です。「ジェネリック医薬品」は後発医薬品といい、「新薬」の特許期間などが過ぎた後に、別の会社が同じ有効成分を使って開発・販売するお薬で、効き目、品質、安全性が「新薬」と同等であることを条件に、国から承認されているお薬です。

司会者：ということは、「新薬」と「ジェネリック医薬品」は全く同じものですか？

塩 田：「ジェネリック医薬品」は、「新薬」の有効成分とその量、効き目や安全性は同じです。違うことは、お薬の味や形状、色、添加物などで、飲みにくいお薬の味や形状などを変えて飲みやすくしていることもあります。

司会者：ジェネリック医薬品は価格が安いと聞きますが、どうしてですか？

塩 田：それは「新薬」の有効成分の研究開発と特許取得にかかった、高い費用を払う必要がないからです。「新薬」は有効成分の探索や候補となる成分の有効性・安全性などを確認するため、長い年月と莫大な費用をかけて開発されます。「ジェネリック医薬品」は、この「新薬」の医療現場での使用実績や情報をもとにして効率よく開発するので、開発期間も短く、費用も安く済むため低価格で提供できるのです。

司会者：具体的にどれくらい安くなるのですか？

塩 田：「ジェネリック医薬品」は、国が価格を「新薬」の約2～7割に設定しています。高血圧症や糖尿病などの生活習慣病のように、長い間飲み続けるお薬や、お薬を何種類か飲んでいる場合は特に、低価格である「ジェネリック医薬品」を選ぶと、「新薬」を選んだ場合に比べ自己負担が軽くなります。

司会者：安いのはうれしいですが、効き目や品質などは大丈夫ですか？

塩 田：「ジェネリック医薬品」の有効成分は「新薬」と同じで効き目や安全性が確認されたものです。さらに、法律にもとづく基準や規制を守って、開発・製造されています。そして、国の審査をクリアし、効き目や安全性が「新薬」と同じだと認められてから発売されます。

司会者：「ジェネリック医薬品」は副作用の心配はないのですか？

塩 田：先ほどもお話したように「ジェネリック医薬品」は「新薬」と同じ有効成分で、同じ効き目です。つまり副作用も安全性もどちらも同じです。ただ、お薬は、病気やけがを治療する役割を持つ一方で、副作用が発生するリスクも持っています。副作用は必ず現れるものではないですが、気になる症状が現れたら、「新薬」・「ジェネリック医薬品」にかかわらず、すぐかかりつけの医師・薬剤師に相談してください。

司会者：では例えばどんな病気のお薬に「ジェネリック医薬品」がありますか？

塩 田：現在、国内でも多数の医薬品メーカーが「ジェネリック医薬品」を製造しており、お薬の種類も多岐にわたります。お薬によってはまだ「ジェネリック医薬品」が発売されていないものもありますが、たとえば、高血圧症、糖尿病、脂質異常症、花粉症、抗生物質、抗がん剤などたくさんの病気に対応しています。また錠剤、カプセル剤、注射剤、点眼剤、貼付剤などいろいろなお薬の形状が工夫され開発されています。

司会者：お薬に工夫をするということは、どういうことですか？

塩 田：「ジェネリック医薬品」は、「新薬」の特許が切れた後に発売されるお薬です。特許期間中には、たくさんの患者さんが処方を受け、医師・薬剤師・看護師などの医療関係者に取り扱われています。そこで出た「こうだったらいいのに」という声を集めて「ジェネリック医薬品」はさまざまな工夫を加えています。患者さんが飲みやすいように、大きくて飲みづらい錠剤を小さくしたり、水なしでも飲める錠剤（OD錠）にしたり、コーティングなどで苦味を少なくしたりしています。また、お薬の名前を錠剤に印刷して飲み間違いを防ぐ工夫もあります。例えば、睡眠導入剤は寝る直前に飲むお薬ですね。そのお薬を飲むために水を飲むと夜のトイレが心配な方がいると思います。その場合、水なしで飲める錠剤（OD錠）なら安心ですよ。

司会者：例えば、自分が使っているお薬に「ジェネリック医薬品」があるか調べることはできますか？

塩 田：「ジェネリック医薬品」は、さまざまな病気に対応していると先ほどお話ししましたが、インターネットなどでも簡単に検索することができます。そして「ジェネリック医薬品」に替えたいと思ったら、かかりつけの医師・薬剤師に相談しましょう。

司会者：ここまで聞くと「ジェネリック医薬品」はとてもよさそうですが、他にもいいことがありますか？

塩 田：医療費は医療機関の窓口で支払う負担額の他に、国や地方の税金、国民保険組合・健康保険組合などの保険料でまかなわれています。少子高齢化が進む日本で、医療費の中の薬剤費は年々増え続けています。自分の窓口負担だけでなく、「ジェネリック医薬品」を使うと国の医療費の節減につながります。海外では「ジェネリック医薬品」は一般的なお薬で、アメリカ、カナダ、イギリス、ドイツなどの医療先進国では、普及率が60%を超えていて、中には80%が「ジェネリック医薬品」という国もあるそうです。日本における「ジェネリック医薬品」の普及率は50%を超えたところで、欧米諸国に比べ低い値となっています。そこで、国全体での医療費高騰が財政に及ぼす影響を踏まえ、医療費抑制のためにも国の方針として「ジェネリック医薬品」の使用が推進されています。

司会者：では最後に「ジェネリック医薬品」を処方してもらうにはどうしたらいいのですか？

塩 田：「ジェネリック医薬品」は、今、全国的に普及が進んでいます。全国の病院・診療所・保険薬局で、処方・調剤されている身近なお薬です。まずかかりつけの医師に「ジェネリック医薬品」の処方ができるか相談してみましょう。一つ一つのお薬に対して「ジェネリック医薬品」に変更してもよいか、医師が判断します。そして、処方せんを確認しましょう。処方せんの「変更不可」欄に「✓」または「✕」がついていないお薬は、「ジェネリック医薬品」に変更できます。または、薬剤師に処方せんを渡す時に「ジェネリック医薬品」の希望を伝えて相談してみましょう。薬剤師からお薬について説明してもらってから、「ジェネリック医薬品」を一緒に選ぶことができます。